キリスト教世界の女性たち

宗教右派からフェミニスト神学まで

小原克博

はじめに

女性と宗教というテーマを考えるときに、それともっとも深い関わりを持ってきた宗教の一つがキリスト教だと思います。女性に男性と同じ権利を認めるべきだ、と言い出したのはキリスト教世界の女性たちでした。今日のキリスト教会および神学の中では、女性に関するテーマが非常に大きく扱われてきています。女性の視点を入れないで事柄を扱うと、それは男性的なものの見方ではないか、と批判されてしまいます。それくらいに、女性の視点をどの程度配慮しているか、ということが大切であり、そのことが人の見識をはかる一つの基準になっています。

これから話すことは大きく三つの部分からなっています。第一に、女性と宗教の関係に注目して歴史を概観します。第二に、女性に対するもっとも保守的な見方をするグループの一例として宗教右派を取り上げます。第三に、宗教右派と対極にあるフェミニスト神学の現状についてお話ししたいと思っています。

具体的な話に入っていく前に前置きしておきたいこ

とがあります。それは、キリスト教と一口に言っても、そこにはもはや一括りにできない大きな幅があるということです。まず私の立場を申し上げますと、私はいま同志社大学で教師をし、同時にプロテスタントの牧師でもあります。キリスト教はヨーロッパで勢力を拡大していきますが、後に東方世界と西方世界に大きく分かれていきます。西方世界の中心はカトリック教会でしたが、その中から生まれた一つの勢力がプロテスタントです。宗教改革者ルターがカトリック教会から破門され、それがプロテスタント誕生のきっかけとなります。

ルターがなぜ宗教改革を起こしたかというと、当時のカトリック教会のあり方への批判があったからです。ドイツやスイスを中心に生まれたプロテスタントは、後にイギリスに渡り、さらにオランダを経由して新大陸アメリカへと渡っていきます。アメリカにはたくさんのカトリック信者がいますが、建国以来、国の政治や歴史に大きな影響を及ぼしてきたのはプロテスタントであったと言えます。アメリカの歴代の大統領も、カトリックのジョン・F・ケネディ以外はすべてプロテスタントの信者です。

プロテスタントと言っても、実際には多数の教派に分かれています。また、単に数が多いというだけではなくて、ものの見方が随分違います。プロテスタントであっても、教派や信仰理解の違いによって、一つの問いに対してまったく違う答えが返ってきます。右から左まで実に様々です。悪く言えば、まったくまとまりがないということになります。しかし同時に、それが現代のキリスト教の魅力でもあるのです。キリスト教を見れば、およそ人の考えそうなことすべてが含まれているのではないか、と思われるほどに層の厚みがあると言えます。

今日はその層の厚みを、女性に焦点を当てて紹介したいと思っています。私はここでキリスト教から見た答えのようなものを示そうとは考えていません。むしろ、どんな問いがあるのかということを、できるだけたくさん提示したいと思っています。それがおそらく他の宗教や信仰者にとっても意味のあることだと思い

ます。問いをきちんと立てることなく慌てて答えを求める宗教には残念ながら、ろくなものがありません。「私は答えを得た。これが答えだ！　あなたたちはこれを信じなさい」という形でその答えを押しつけようとするときに、様々な争いが生じます。

いま私たちにとって大事なのは、女性の問題を考えるときも、早急に答えを出そうとすることではなく、むしろ「どんな問題があるのか、どんなふうに私たちは現代という時代においてその問題を共有することができるのだろうか」ということをお互いに出し合うことではないでしょうか。そして、そういう問いに悩んだり、行きつ戻りつしながら、その問題に関わっていく中で、取り組むべき課題が徐々に見えてくるのではないかと思います。

一　キリスト教における女性理解の変容と多様性

（一）通時的（diachronic）視点から

キリスト教における女性理解の変容と多様性について話したいと思います。まず通時的な視点から、言い換えるなら、歴史的な視点から女性理解の変容を見ていきます。キリスト教の歴史だけをとっても、女性理解は非常に大きく変わってきています。最初期のキリスト教においては、男性・女性の性別役割といったものはほとんどありませんでした。そうした因習から解放された喜びが、多くの信者の間で共有されていたからです。他方、当時の一般社会では男女の別が厳格に存在していました。キリスト教が伝播していったのは、ギリシャ・ローマの世界です。ローマの社会は厳然とした家父長制社会でした。家父長制においては、男性が権力を持ちます。家父長である男性、すなわち父親や祖父などが圧倒的な力を持って、妻や子供はその力のもとで保護され管理されます。女性や子供が家父長の財産、所有物と見なされることも少なくありませんでした。こうした家父長制社会はローマに限られたものではなく、同時代の世界においてはかなり一般的に見られました。

イエスが宣教活動をしたパレスチナ地方はどうであ

ったかと言うと、やはり非常に家父長制的な社会でした。典型的な男系社会であったと言ってよいと思います。男女の違いをわきまえることは当然の常識であったのです。男女の別をきちんとするということは、かつての日本でも当然のことと考えられていました。その区別のできない人はだらしない人間とされました。たとえば、座る場所にも男女の別がありました。男性の席と女性の席が、明治の頃はきちんと分けられていました。ユダヤ教は、男女の区別や浄い者と浄くない者の区別などを規定する厳密なルールを持っていました。そうしたルールを、意図的に蹴飛ばしていったのがイエスです。宗教家たちがきれいに築き上げた壁を踏み倒していくような態度をイエスは取りましたから、当時の宗教家たちから非常に大きな反発を買うことになりました。それは、イエスが十字架にかけられる原因の一端にもなりました。

キリスト教は、パウロのような宣教者によって精力的にギリシャ・ローマ世界へと伝えられていきますが、最初期においては、イエスがあまり間を置かずに自分たちのもとに帰ってくるという信仰が強くありました。これを終末待望と言いますが、イエスの再臨と共に世の終わりがやって来るに違いないと多くの人が信じていたのです。したがって、そうした終末待望の中では、既存の社会秩序を離れて、女性が教師であったり預言者であったりするという、後の時代からは考えられないような状況があったのでした。

しかし、いくら待てども終わりの時が来ることはなく、次第に終末待望が薄らいでいく中で、同時に教会の組織化が進んでいきます。そうした状況の中で、当時の社会で当然視されていた家父長制的なものの考え方が、キリスト教の中にも徐々に忍び込んできました。当初キリスト教にあった男女の境を越えたような考え方は次第に失せていき、それに連動するように、キリスト教は自らが置かれた社会の常識に馴染んでいくことになります。基本的には、この状態が二千年という歴史のかなりの部分を覆っていたと言ってよいと思います。すなわち、二十世紀に至るまで、大体、男性中心的なものの考え方が支配的だったのです。

それがようやく変わり始めたのが一九六〇年代です。このころ、アメリカを中心に女性解放運動が始まり、これまで口にすることすらタブーとされてきた女性の権利の問題が正面から取り上げられるようになります。そういう機運の中で、キリスト教の中でもそれに対応した動きが起こってきて、フェミニスト神学が形成されていくことになります。したがって、今日話題にする多様性、とりわけ女性理解の多様性は、六〇年代以降急速に広まってきたものとして理解することができます。

(二) 共時的 (synchronic) 視点から

次に、共時的な視点から見てみましょう。これはわかりやすい言葉で言いますと、私たちが生きている同時代の視点から見る、ということです。六〇年代に女性解放運動が始まり、フェミニスト神学などが形成されてきましたが、西欧社会が一方的にその方向に向かっているかというと、そうではありません。そのような動きに対し、まさに振り子の反動のような形で、伝統的な家族観や家父長制的なものの考え方の方が正しいのだ、という主張が強まることがあります。つまり、女性の解放を目指すリベラルな動きと、旧来の伝統を守ろうとする保守派の両方が拮抗する形で存在しているのが現代の特徴です。

これは、アメリカの大統領選などを見ているとよくわかります。クリントン前大統領の頃は明確にフェミニスト寄りのリベラルな政策を展開した時代でした。現在のブッシュ大統領は、それとは逆に寄ったような立場にあります。もちろん、ブッシュ大統領が女性の問題を無視しているというわけではありませんが、基本的に男性がリーダーシップをとって女性を庇護する、「古き良きアメリカ」の家族像を理想に持っている人物の一人であります。したがって、時代はある方向に一方的に動いているのではなくて、一方が動けば、他方に揺り返す、といった側面があります。両方のベクトルがあるということをきちんと押さえておかなければ、私たちは物事の一面しか見られなくなってしまうと思います。

女性理解の多様性というものが目に見えて表れてくるのは六〇年代以降ですが、それらはいずれも歴史的な産物です。これを図表にしたのが図1です。太古の時代は必ずしも家父長制社会ではなくて女神崇拝に代表されるように、父系より母系が強いということがありました。男性的な神よりも女性的な神のほうが高く位置づけられた社会があったのです。そういったことが考古学を通じて明らかになってきました。しかし、それは後の歴史の主流にはなりませんでした。

ユダヤ教は全体的には男性中心的なイメージが強いですが、中には知恵思想といって、神を女性的なイメージで描くような伝統もあります。他方、イエス運動、つまり、イエスによって展開された運動は、先ほども言いましたように、そのすべてが後の教会に引き継がれていったのではなくて、男女理解に関しては、むしろ家父長制的な考え方が歴史を覆っていくことになります。しかし、イエスが女性に対して取った態度が後にフェミニスト神学に影響を与えていきます。

家父長制と共に考えなければならない概念として性

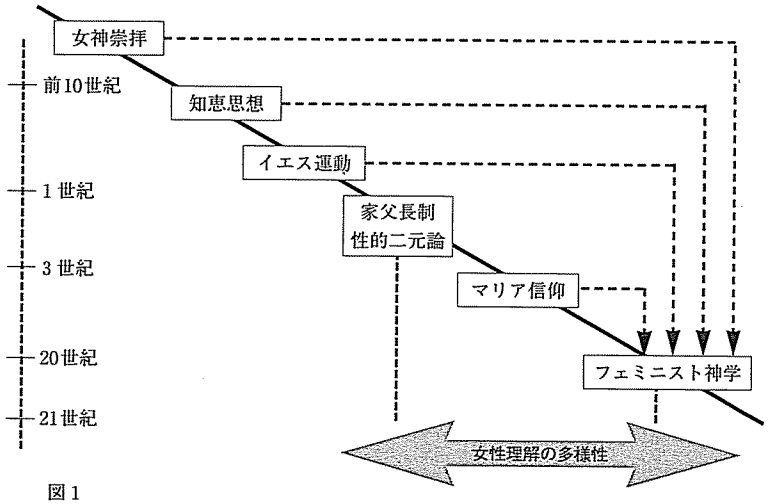

図1

的二元論があります。男性と女性の違いを単に生物学上の性差としてとらえるだけではなく、そこに、ある価値の序列を付けるのです。すなわち、男性はより理性的であり、より精神的であり、より霊的な存在であり、それに対して女性は感情的であり、本能的であり、肉的な存在であると考えられました。こうした性的二元論はアリストテレスなどのギリシャ哲学に由来します。結果的に、ギリシャ的な伝統をキリスト教は引き継いでいくことになります。このような長い伝統を克服しようとするところから、六〇年代の女性解放運動が始まったとも言えます。

家父長制的なキリスト教の歴史の中で異色の存在として、カトリックのマリア信仰があります。カトリックが強い国々に行くとよく感じることですが、イエス・キリストへの信仰より、ある意味で、マリアへの信仰の方が強く前面に出ています。マリアについての民間伝承もたくさんあります。男性色の強い神理解に対して、それとバランスを取るような形でマリア信仰が広まっていったのではないかという見方もあります。それは現代のカトリックに至るまで継承されていますが、プロテスタントの場合、宗教改革の際に、マリア信仰は本質的でないとして取り除かれました。それに対し、カトリックではいまだにマリア信仰は強い影響力を持っています。これが、肯定的な意味でも否定的な意味でも今日のフェミニスト運動に影響を与えています。

二　宗教右派について

次に、宗教右派とフェミニスト神学という、いわば両極の問題について触れていきますが、当然その両者の間には様々な中間バリエーションがあります。しかし、どういう極があるかのかを知ると、その間にあるもののイメージをつかみやすくなります。

宗教右派は、これまでの伝統に価値を見出そうとし、それゆえ、変化を嫌う傾向があります。その意味では、宗教右派に属するキリスト教は、性的二元論を多かれ少なかれ受容しています。このように今日の宗教右派というのは、この数十年の間に突然生まれたのではな

くて、長い歴史の中で培われてきた部分があります。

他方、フェミニスト神学の出現は六〇年代以降です。しかし、フェミニスト神学に関連する事柄は、かなり昔まで遡ります。フェミニスト神学は、女神崇拝の影響を受けていますし、知恵思想やイエスの思想、マリア信仰などからも影響を受けています。歴史的な蓄積の結果、現代におけるフェミニスト神学に多様性がもたらされているのであり、その一つひとつの主張が歴史を代弁していると言えます。

宗教右派は religious right の訳語ですが、実際には一口でまとめ切れないぐらいに幅があります。たとえば、政治一般に対する考え方、国家の政策に対する態度、生命に対するものの見方など、いろいろな点で違いがあります。ここでは、比較的わかりやすい形で社会に姿を現しているアメリカの宗教右派を中心にとりあげ、その特徴を紹介したいと思います。

宗教右派がどういうとき、もっとも話題にされるかというと、やはり大統領選挙のときです。現在のジョージ・W・ブッシュ大統領が誕生した背景の中で、この宗教右派の動きを無視することはできません。つまり、宗教右派の基盤の上に、あるいは、その支持のもとに今回のブッシュ政権が誕生しています。彼らの支持がなければ、恐らく早々にゴア候補に負けていたことでしょう。その関係から、ブッシュ大統領は何か事があるたびに、彼らのご機嫌を損ねないような発言をせざるを得ないところがあります。

一例をあげます。最近、人の胚をクローン技術によって作成することに成功したとアメリカの科学雑誌に発表されました。作成された胚は、ある段階で破棄されたので、現在生育しているものはありませんが、生育させて母体に戻せばクローン人間が誕生することになります。技術的には、そういう段階にまで来ています。この研究に対し、ブッシュ大統領が強い批判をし、その研究に対する牽制をしました。これは明らかに、宗教右派の考え方です。生命を操作してはいけないという考え方に立って批判したのです。もちろん、国益から考えると、どんどん進めたほうがよいのです。こうした生命科学の先端研究を進め、様々な特許をとって医薬品を開発すれば、アメリカはどんどん儲けることができるからです。しかし、国益を差し置いても、とりあえず大統領としてはこの研究を批判するということの背景には、ブッシュ大統領自身の信仰理解だけでなく、宗教右派からの影響力が存在していると考える必要があります。

宗教右派の形成を考えるとき、六〇年代、七〇年代に一つのターニングポイントがあったと見ることができます。六〇年代以前の宗教右派は政治には一切タッチする必要はない、信仰者は信仰のことだけを考えていればよい、と考えていました。しかし、六〇年代、七〇年代において政治をめぐる紆余曲折を経る中で、自分たちがこのまま政治の変化に口をつぐんでいれば、アメリカという国がおかしくなってしまうと考えるようになり始め、それ以来、政治の世界に積極的に関与していくようになります。宗教右派の中には、全米的な広がりをもって、草の根的な政治団体として動いているグループも多くあります。

（一）宗教右派が批判するもの

宗教右派の信仰理解はシンプルなものが多く、思想的にもはっきりとした傾向を持っています。宗教右派の人々は、同性愛、フェミニスト、自由主義的な福祉政策、相対主義、寛容といったものを嫌います。もちろん、どこに批判の重点を置くかということはグループによって様々です。

いずれにせよ、宗教右派の人々は、同性愛に対して嫌悪感を持つことが多いと言えます。彼らが求めているものは伝統的な家族像です。「伝統的な」というのは様々な理解の仕方があるにせよ、その歴史的起源の一つは家父長制的な家族理解です。つまり、大黒柱のようなお父さんがいて、そのお父さんの言うことに従順に従い、家事をきちんとこなすお母さんがいて、そして、両親の言うことをよく聞く、かわいい子供たちがいる、といった感じの家族、たとえば「大草原の小さな家」に出てくるような家族が、アメリカ人のノスタルジーをくすぐるのです。それに対し、現在では、そうした伝統的な家族像が崩れてしまった結果、社会全

体がおかしくなっていると考えます。それゆえ、古きよき時代の家族を回復することに、宗教右派の人々は大きな使命を感じているのです。そのような立場からすれば、男性と男性が愛し合う、あるいは女性と女性が愛し合う同性愛は、きわめて受け入れ難いわけです。同性愛は伝統的な家族像を破壊するものでしかないと、彼らの目には映るからです。

宗教右派がフェミニストを嫌うことは明らかでしょう。女性が自己主張をして、徐々に権利を獲得し、男性を脅かすことを彼らは恐れます。女性が社会進出すれば、男性の職を奪うことにもなります。また、彼らにとって男性と女性の性別役割分担は、かなり本質的なものなのです。しかし、フェミニストの立場からすれば、それは決して絶対的なものでもなければ、本質的なものでもありません。それは社会的に形づくられたものであって、そのような性差を分析するための言葉としてジェンダーという概念が作り出されました。ジェンダー概念を用いて、男性の優位性を揺るがすフェミニストが、宗教右派の人々の批判対象となるのは当然のことと言えます。

宗教右派がなぜ自由主義的な福祉政策を嫌うのかについては説明が必要でしょう。自由主義的な福祉政策では、貧しい人や、子どもを養育しなければならないシングル・マザーに経済的な援助をします。しかし、宗教右派の立場からすれば、そうした経済援助は伝統的な家族を作っていくことの妨げになります。たとえば、シングル・マザーでも給付金をもらって十分生活がやっていける状況になれば、シングル・マザーとして生きていく選択をする女性がおのずと増えていきます。そのような宗教右派の人々が理想と考える家族像から逸脱した形態の家族が増え広がっていくことに、彼らは大きな危機感を持っているのです。

相対主義というのは、ある特定の価値観を絶対視しないで、多様な価値観を平等に見ていく態度のことです。こうした態度も、宗教右派の人々には耐え難いところがあります。彼らには、これこそが正しいという絶対的な価値基準があるからです。この相対主義の理解をめぐって、具体的な事件になりやすいのは、公教

育における宗教教育の問題です。アメリカでは、アメリカ合衆国憲法の厳密な政教分離原則のもとに、特定の宗教が公教育において教えられることは禁止されています。最近の事例を一つあげると、フットボールの試合の前に生徒が自発的にお祈りしたことが合憲か違憲かで争われて、それが違憲だという判決が出たことがあります。すべてを相対主義でやろうと思えば、キリスト教の祈りであっても公教育の場ですることは許されないということです。かつては、キリスト教の祈りは公教育においても公然と行われており、それは大きな問題にはなりませんでした。しかし今日では同じ学校にユダヤ教徒もいれば仏教徒もおり、そうした状況を配慮して相対主義的な原則論に従えば、キリスト教という特定宗教の祈りが公の場でなされるのはよくない、という結論になります。しかし、宗教右派の人々からすれば、この結論は容認しがたいものです。彼らにとっては、アメリカという国家はキリスト教の精神で成り立っています。そのようなキリスト教の特別の位置を、相対主義的な考え方によって蔑ろにしてはならないと考えるのです。

相対主義と関連するのが寛容の問題です。何に対しても寛容になりなさいということは、受け入れられるものと受け入れられないものとの区別をはっきりさせる宗教右派の基本姿勢からは、到底許容されません。寛容の問題は、他の宗教に対する姿勢において表面化することが多いと言えます。大ざっぱに言って、宗教右派の人々はイスラーム信者に対して批判的な態度を取ることが多く、また、彼らをキリスト教に改宗させるための伝道対象と見なすことが少なくありません。

(二) 宗教右派が求めるもの

宗教右派が批判するものがわかれば、宗教右派が求めるのはその裏返しとして理解できます。彼らが求めるのは、家父長制的な伝統に基づく伝統的家族です。それを現代社会において回復させなければならないと主張します。結婚にも大きな価値を置きます。合わせて男性の権威も求めます。男性の権威向上を政策のトップに上げているような宗教右派グループとしてはプ

ロミス・キーパーズが有名です。父親の復権を目指して、男性ばかりで結成されている草の根集団です。

先ほどの自由主義的な福祉政策に対して、限定的な福祉政策を宗教右派は求めます。つまり、経済的に困窮しているというだけで、むやみに援助をするのではなく、彼らが考える伝統的な家族に近い者に対してのみ、限定的に公的予算を使うべきだと主張するのです。また、彼らが最終的に求めているものの一つが、キリスト教国家としてのアメリカです。それを垣間見るような発言がブッシュ大統領からも繰り返し出されています。政教分離の原則からすれば、どの宗教も国家に対し特別な位置を占めるべきではないのですが、現実的には、アメリカではキリスト教、特にプロテスタントの伝統が圧倒的な影響力を持っています。それゆえ、アメリカの裁判所に旧約聖書の「モーセの十戒」が掲げられていたり、歴代の大統領は就任式の際、聖書に手を置いて牧師の導きのもと神の名において宣誓をするのです。これは政教分離の原則から言うと明らかにおかしいのですが、慣例的に許容されています。その意味では、アメリカにとってキリスト教は今なお「見えざる国教」としての位置を占めており、それをいっそう明確にしたいという欲求を宗教右派の人々は持っているのです。

三　フェミニスト神学について

フェミニスト神学は、現代のキリスト教を語る上で、もはや欠くことのできない領域としての存在感を持っています。フェミニスト神学は、実に多様な主張や論点を持っており、その多様性が一つの魅力でもあります。ここでは七つの特徴をあげました。

女性理解に関して言うと、フェミニスト神学は宗教右派の対極に当たります。それは女性の視点を最大限に盛り込んだ考え方であり、また運動であると言ってよいと思います。

（一）キリスト教の歴史的起源の再解釈

イエスが活動していた時期、あるいはその直後の弟子たちの中には、その後の歴史とは異なる女性理解があったということに、最近ようやく光が当てられるようになりました。それはフェミニスト神学の一つの功績であると思います。二千年の歴史から見るとその期間はわずか一パーセントにも満たないかもしれませんが、最初期にはきわめて斬新な女性理解や女性の活躍があったことは重要です。ギリシャやローマに見られたような家父長制や性的二元論に対抗し得るような思想や運動が最初期にはあったということが、フェミニスト神学者による聖書研究や歴史研究によって明らかにされてきました。

（二）女性の視点による聖書解釈の見直し

新約聖書の各文書は人の手によって書かれて、四世紀になって一つの書物として正典化されていきます。新約聖書には全部で二十七の書物がありますが、いずれも例外なく男性によって書かれています。その点に関しては、旧約聖書（ヘブライ語聖書）もまったく同様です。また聖書を書いた人だけでなく、後の時代において聖書を解釈する人たちもすべて男性でした。したがって、聖書をどう理解するか、どう読むか、そしてどう伝えるかということは、すべて男性の視点でしかなされてこなかったのです。プロテスタントが誕生する以前、聖職者はすべて男性でした。男性によって書かれた聖書を、男性の視点から解釈し、伝えていくという行為が、ほぼ二千年間延々と繰り返されてきました。ところが、同じ聖書を女性が女性の視点で読んだときに、男性とは異なった解釈がなされたり、あるいは、見過ごされてきた箇所がたくさんあることがわかってきました。

聖書の中には、たとえば「妻は夫に従うべきである」という言葉もあります。これまでは、「こういう言葉があるから、妻は夫に従わなければならないのだ」と金科玉条のごとく、特定の聖書箇所が突きつけられてきました。しかし、聖書を批判的に読んでいくと、それが聖書のメッセージのすべてを言い表しているのではないとわかります。結論的に言うと、聖書そのものが何か特定の性理解を持っているわけではありません。聖書に収められている文書を読み比べてみると、明ら

かに矛盾する箇所がたくさんあります。しかし、そうした矛盾を一つにまとめる必要はありません。聖書の各文書は書かれた場所や年代が異なりますから、当然そういう違いはあります。聖書の言葉であっても、ある特定の箇所だけを取り出してそれを絶対視することの危険性が徐々に認識されてきています。

(三)「包含的言語」による聖書翻訳

「包含的言語」による聖書翻訳も、聖書理解の変化の一例です。「包含的言語」は英語で inclusive language と言いますが、これまでの翻訳が包含的ではなくて排他的だったという理解がその前提にあります。聖書は旧約聖書であれば主にヘブライ語で書かれていますし、新約聖書はギリシャ語で書かれています。それが各国語に翻訳されています。翻訳には必ず解釈が入ります。英語の聖書だけでも、数え切れないほどの翻訳があります。しかし最近になって、その翻訳に翻訳者である男性の解釈が入り過ぎていたのではないか、あるいは、権威的な人々の視点からのみ翻訳されてきたのではないか、という問題提起がなされるようになってきました。包含的言語による聖書翻訳では、女性差別の問題だけでなく、黒人差別、ユダヤ人差別、障害者差別なども考慮に入れています。つまり、そういった人々の視点に立たないで、むしろそういった人々を排除するような形で翻訳がされてきたのではないか。もしそうだとするならば、そのような排他的な言葉によって翻訳するのではなくて、より包含的な言語で翻訳をし直さなければならない、という風潮が、この五年から十年ぐらいの間に非常に高まってきました。現在も新しい翻訳の聖書は、特に英語圏で次々に出ていますが、包含的言語をまったく意識しないで翻訳されることはまずあり得ないと言えるでしょう。

一例をあげてみます。キリスト教の神理解で、神は父というイメージと結びついてきました。"Our Father in heaven" というのは「天におられる私たちの父よ」という意味で、これはイエスが「こう祈りなさい」といわれた「主の祈り」における神への呼びかけの言葉です。「主の祈り」は、毎日曜日に世界中の教会で祈られ

ている共通の祈りですが、その最初の言葉が、英語ではこのようなスタイルでなされてきました。しかし、神を "Father" と呼ぶことによって、結果的に男性を特権化しているのではないかということから、この言葉を積極的に置きかえていこうとする動きがあります。"Our heavenly Parent" のように「父」ではなく「両親」としてみたり、"Our Father-Mother in heaven" というように父と母を併記したり、"Abba God in heaven" と置き換えたりする例があります。"Abba" は、もともとイエスが使ったといわれるアラム語で「お父ちゃん」を意味する親密さを含んだ言葉です。現代人からすれば抽象的な響きを持つ言葉に置きかえることによって、神の男性性をなるべく和らげる、あるいは相対化しようとする配慮がここにはあります。該当の箇所は、新約聖書の原文のギリシャ語では「パーテール」と記されており、それは明らかに「父」という意味です。しかし、それを翻訳のプロセスの中で、今の時代にふさわしい言葉に変えていこうとする努力がなされているのです。もちろん、やりすぎると改ざんにもなりかねない、きわどい作業であるとも言えます。

また、この問題の背景には現代特有の難しい事情もあります。アメリカでは親による子どもの性的虐待の問題が深刻です。父親から性的な虐待を受けた娘が、神を父と呼べるか、という問いかけが当然なされます。男性を見るだけで嫌悪感をもよおす女性に「神は父だから父と呼びなさい」と言うことはできません。そういう人に対しては「もっと自由に神を呼んでいい。それは母であってもいいし、違う呼び名であってもいい」と言うのがむしろ望ましいということが、教会の中でも徐々に受け入れられつつあります。

(四) 新しい神理解の形成

聖書を丁寧に読んでいくと神を女性的なイメージであらわしている箇所が結構あります。新約聖書では神と父のイメージの結びつきはかなり多いですが、旧約聖書では「父なる神」という表現は非常に少ないです。むしろ、神についての多様なイメージを喚起することによって、人間が神を人間の思いこみの中に固定して

しまうことの愚かさを旧約聖書は教えてくれているようです。旧約聖書では、特に偶像崇拝への警戒が繰り返し語られています。人間は、自分が持っている願望を神に投影しがちです。そして場合によっては、それを偶像という形にすることによって、自らの欲望を満たすのです。男性であれば神に男性的なイメージ、たとえば、強さとか権力などのイメージを投影することによって満足を得ることが少なからずありました。そういうことを、聖書は厳しく戒めています。したがって、本来の聖書の視点に立ち戻って、神を特定のイメージで理解するのではなく、むしろ多様なイメージの中で理解していこうとする動機づけが、新しい神理解の模索の中にあります。

「天にまします我らの父よ」という神への呼びかけに代表されるように、キリスト教の伝統的な理解によれば、神は天空にいる神でした。現代において、天といってもそれを象徴的に解釈しますが、古代の世界観では、天空には神々や天使が住む世界が実在すると考えられていました。しかし、天空から地上を支配する神のイメージが、特に自然破壊との関連で問題視されてきた経緯があり、逆に最近では、神と大地とのつながりが見直されてきています。大地の神、ガイアとして神を理解しようとするフェミニスト神学の試みなどはその代表例です。また、従来のキリスト教では十分でなかった母性的な神理解を再評価していこうという動きもあります。

（五）異文化に生きる女性同士の連帯

初期のフェミニズムやフェミニスト神学では、運動の主体は、欧米における中産階級以上の学歴ある女性たちでした。しかし、そうした女性たちの視点がいかに限定的なものであるかということを、第三世界を中心とする女性たちから指摘されるようになります。「あなたたちが語っているのは白人の世界のことだけではないか」「あなたたちが言っていることはアメリカの中でしか通用しないのですよ」といった批判が突きつけられることによって、一口に「女性」と言っても、そこにはいろいろな立場があり、その立場の違いによってテーマも考え方も異なってくる、ということが徐々に認識されてきました。

そうした気づきの中から、白人女性たちも、自分たちの立場でものを言うだけではなく、世界の女性たちと広く連帯して、もっと多角的に女性の問題を考えていかなければならないと認識し始めてきました。現在のフェミニスト神学は、特にそのような点に配慮をしていますし、また、非西欧世界からの問題提起も広くシェアーされるようになってきています。

（六）セクシュアル・マイノリティとの方法論的連帯

宗教右派は同性愛者を批判しますが、フェミニスト神学は同性愛者に対して擁護的な態度を取ります。同性愛者にしても女性にしても、男性支配的な社会の犠牲者であるという点では変わらないからです。したがって、男性中心的な考え方、そしてそこから派生する男性中心的な異性愛至上主義をどのように克服していくかという点に関しては、フェミニスト神学が模索している方法と、同性愛者たちが自分たちの権利回復のために模索している方法とは、重なる部分が非常に多いと言えます。

（七）エコロジーへの新しい視座の提供

今日、フェミニスト神学者たちのきわめて多くがエコロジーの問題にも強い関心を持っています。これは、先に述べた性的二元論と関係があります。つまり、男性が女性を支配することが当たり前とされてきたように、人間が自然を支配するということが西欧の歴史の中では当然視されてきたことに、フェミニスト神学者たちは注目します。つまり、女性が男性社会の中で自分たちの立場を再解釈していくのと同じように、人間の身勝手さによる自然破壊の問題も合わせて考えていかなければならないと考えます。支配と従属という関係を、男性と女性の関係だけに限定しないで、それをベースにしながら、他の同型の問題を自分たちの課題として引き受けていく姿勢がフェミニスト神学には見受けられます。フェミニズムとエコロジーが具体的に

結びついたものとして、エコフェミニズムがあります。これは単なる思想ではなく、具体的な運動をともなって広い支持層を有しています。今日のフェミニスト神学は、こうしたエコフェミニズムからも大きな影響を受けています。

まとめ

それぞれの宗教で固有の女性理解が主張され、受容されるのは、信教の自由に属する事柄であると言えます。タリバーンを例にあげてそれを考えてみましょう。タリバーンの女性理解は、先ほど紹介した宗教右派の理解を極端にまで推し進めたような特徴を持っています。彼らの理解によれば、女性は徹底的に慎み深くあらねばなりません。そして、身体のほとんどの部分を衣服やベールによって覆い隠すことが義務づけられています。また、タリバーンは、女性は教育を受ける必要がないと考えていました。もちろん、タリバーンの理解はイスラームの中でもきわめて極端な部分に属しますから、それとイスラームの一般的な理解とを区別しておく必要はあります。いずれにせよ、タリバーンが支配する社会の中で女性たちがそうした生き方を自ら好んで選んだとすれば、それに対して第三者が口を挟むことはできません。それこそまさに信教の自由であって、第三者から見てその選択がどれほど愚かしく見えたとしても、その選択は尊重される必要があります。しかし、実際にどうであったでしょうか。タリバーンの支配から解放された途端に、女性たちは喜んでベールを脱ぎ去り、自分たちの顔を現すことによって自由を表現していました。したがって、タリバーン政権下の女性の生活は、決して彼女たちが自発的に選んだものではなかったことがわかります。

これまで話してきたように、いまの時代には、実に様々な女性理解が存在しています。その中からどのような生き方を選び取るかは、女性の自由に属する事柄であるはずです。しかし、この多様な女性理解が提示されないで、ある特定の考え方だけが独占的に主張されるときに問題が生じます。それを表現する言葉として「パターナリズム」をあげたいと思います。日本語

に訳すと「父親的温情主義」といった意味になりますが、主として医療現場の問題を指摘するために用いられてきた言葉です。医者は、医学的な知識に関しては患者より圧倒的に多くのものを持っていますから、これまでの患者はとにかく医者の言うことに従順に従っておけばよかったのです。父親が子どもに物事を諭すように、医者は患者に対し、よかれと思うことを示しておけばよかったのです。これがパターナリズムと呼ばれていることですが、今後の医療では、このような関係は望ましくないと考えられています。つまり、医者は自分の価値観に拘わらず、患者が選択できる可能性をすべて説明し、了解してもらった上で、治療法を決定していく必要があるということです。

同じことが女性理解にも言えます。多くの選択肢が示されないで「これが理想なのだ」ということだけが押しつけられると、これはまさにパターナリズムになってしまいます。それに対し、女性の多様な生き方が示され、自発的に選択されたときに、そこで選び取られた生き方のそれぞれが固有の責任と自由を伴ってきます。この点は、それぞれの宗教においても考えられなければなりません。この点に関して私が言いたいのは、女性の生き方をめぐる「潜在的選択能力」(capability)がどの程度保障されているかによって、その宗教における女性理解の成熟度が図られる、ということです。幅広い選択可能性を踏まえた上で「私はこれを選びました」ということが自分の言葉で確認されるとすれば、そういうプロセスを保証している宗教は、懐が深い、成熟していると言うことができます。逆に、男はこうあるべきだ、女性はこうあるべきだ、ということを最初から結論のように言ってしまう宗教は、選択肢を最初から狭めてしまっているだけでなく、その狭い理想像からはずれる者を排除することになるでしょう。そういう宗教は思考の構造としてはタリバーンに近い存在であると言えます。「こうあるべきだ」という単純明快で断定的なメッセージは、時として魅力的に映りますが、そうした誘惑に抵抗して、真の自由を丁寧に積み上げていく信仰が今後の世界では求められていくと思います。

（こはら　かつひろ／同志社大学助教授）

（本稿は、二〇〇一年十一月二十九日に行われた講演内容に加筆いただいたものです。）